

「ふるさと」はどこにある？

koberyo1

「うさぎ追いし、かの山あー、小鮒釣りし、かの川あー」というフレーズを口ずさむとき、胸がつまり、涙がにじみでる。この歌はわたしの心の「よりどころ」となっている。

さらに心の「よりどころ」といえば、父母であり、育った家だ。しかし、父母とはあまりにも縁が薄かった。というのも、わたしは早くから予科練に志願し、海軍の少年兵として親もとから離れ、軍隊で暮らしたからである。

軍隊生活からスタートし、やがて戦争が終わってからは世間に一人で放りだされた。故郷から離れて生きるのが、わたしの運命であったかと思う。それがどうだ。まさに光陰矢のごとし。いま、わたし自身が父母の入る墓に入ってもおかしくない年齢になってしまった。

思い起こすなら、わたしが生きてゆくうえで妻や、父母自身が心の「よりどころ」になっていたかと思う。それはまた一つの「ふるさと」ではなかっただろうか。うさぎ追いしかの山が、わたしの心のなかにあり、宿りつづけるのだ。

故郷とは、「その人が生まれ育ったところ」と辞書には載っている。わたしが生まれたところは弘前である。が、現実には東京で育ち、東京の学校に行ったものだ。ところが、安定した故郷があり、家も両親も安心した環境で暮らしたわけではない。

いま、回想する。わたしは昭和二年にうまれた。社会という大海原にむかって船出したわけだが、小舟は荒波に揉みに揉まれた。

小舟はあるときには沈みこんでしまいそうになったが、先輩の思いやり、それから多くの人からの友情、また運命を共にしてくれた人にも出会えたからこそ今日まで生きることができた。有難いことである。そしてこれらをひっくるめて「故郷」と呼ぶことはできないだろうか。

故郷とは何かを考えると、ひとまず太平洋戦争後のアメリカの政策が、戦後の日本人に与えた影響を考えざるをえない。アメリカ的な価値観が、家庭や学校、企業や社会の動きまでに影響し、経済的な繁栄をもたらしていったと思う。日本人が抱く「故郷」のイメージもそれにつれ変質していったはずだ。

物質的な豊かさばかりではなかった。

戦後、ありとあらゆるものが変化に変化をかさね、世界の中で日本はしぶとく生き抜き、戦後70年を平和の裡に謳歌してきた。

わたしもまた、戦後の日本を生き、その他大勢のうちの一人だ。一志願兵でしかなかったわたしが、日本の社会の中で沈没もせず、結婚もし、家をつくり、企業人として懸命に働いてきた。

さきほど、これらをひっくるめて「故郷」と呼びたいと書いたが、さらに言うなら。ただ生き抜いてきたそのことにも「故郷」は息づくのだな、と思う。

というのも、生まれた弘前でも、また育った東京でもない。汗水たらして戦後をともに生きて、ここ神戸の我が家にしみついた記憶こそがまた、「故郷」ではないか、と思えるからだ。

オリンピックの選手がこう語っている。「自分で自分を褒めてやりたい」と。じつはわたしは現在、そのオリンピック選手とおなじ心境なのである。

自分のルーツ、すなわち弘前とは現在、つながっていないわたしだが、両親のことを思いながら、戦後は自分が働きながら、まさしく自分の手で「故郷」をつくってきたという自覚がある。それは与えられた故郷ではなく、自分が克ちえた「故郷」なのである。

きっと、このようにして書く文章のうちにも「故郷」が宿っているに違いない。昔のことを思い出し、記憶をまさぐっていると、ふいに父母があらわれる。わたしは胸がいっぱいになり、泣けて泣けてしかたがないのだ。